

いっちょうにゆうこん

一彫入魂

手にした栄冠の
全国第4位 平館高校

はんが甲子園 2017



■本戦大会

会期 3月17日(金)から21日(火)の5日間
会場 佐渡市相川体育館
作品 選手3人が共同作業でテーマに沿った1点を制作。木版(5版以内、色は自由)、サイズ(86mm×55mm以内)で彫り進めます。

■初戦審査

- ①全国の高校から自由テーマで、生徒1人1作品の計3点の作品を募集。
- ②審査員が作品審査を行い、団体部門本戦出場校14校を選出します。

1日目/選手来島 オリエンテーション

オリエンテーションで初めて選手にテーマが伝えられ、佐渡の郷土芸能が披露されます。



2日目/開会式 取材・作品制作

ボランティアドライバーと一緒に、選手自らが佐渡取材し、題材を決定します。

各自で作品を制作した初戦審査の応募作品とは異なり、3人1組でチームを組み一つの作品を仕上げるため、選手それぞれの芸術的なセンスや技術はもちろんのこと、チームワークが大切になります。



3日目/作品制作

限られた時間の中で、体力・気力の限界まで自らを追い込み、徹夜も辞さず彫刻刀を手に木版に向かいます。



4日目/作品制作終了 予備審査 交流会

作品の締め切りは20日の午後6時。出来上がった木版にインクを塗り、和紙に刷り上げて完成します。和紙の紙質や刷る力加減によって意図していた色が表現できないこともあります。また、インクの乾く時間の調整など最後の最後まで気を抜くことはできません。

制作終了後の交流会では選手から作品の説明が行われます。



5日目/本審査 閉会式

佐渡で版画に懸けた5日間、どの高校も達成感に溢れるなか、いよいよ審査結果の発表。歓喜の声が上がります。



平館高校
おめでとう



初めての出場だったので、とても不安でした。佐渡のおいしい料理を味わう時間も惜しみ、遅くまで作品制作に取り組み体力的にも大変でしたが、完成したときは今まで味わったことがないくらいの達成感でした。また来年も出場したいです。



吉田 優愛さん

2種類の和紙に刷ったのですが、色の質感など微妙な違いから、どちらの作品を提出するか意見が合わないことはありましたが、一つの作品を作るためにチーム一丸となり全力を出し切ることができました。この経験は、一生の思い出になると思います。



高橋 黎さん

平館高校は、本戦出場が決まっていた高校が辞退したため、繰り上げ出場ではありましたが、前回大会に続き2年連続2度目の出場。メンバーは前回大会も経験した高橋黎さん(2年)と遠藤大輔さん(1年)を加えた3人でチームを組み出場しました。

■**昨年の経験を糧に**
平館高校は、本戦出場が決まっていた高校が辞退したため、繰り上げ出場ではありましたが、前回大会に続き2年連続2度目の出場。メンバーは前回大会も経験した高橋黎さん(2年)と遠藤大輔さん(1年)を加えた3人でチームを組み出場しました。

■**版画の島・佐渡を舞台に**
通称「はんが甲子園」は、全国でも珍しい版画専門の美術館(佐渡版画村美術館)を持つなど、版画によるまちづくりに取り組む同市の相川町商工会が、全国の高校生を対象に開始した大会です。

■**来年も出場を目指して**
高橋さんは「まさか受賞できると思わなかったのだけれど、よかった」とメンバー2人と喜びを分かち合い、「来年以降も上位を目指して出場し、平館高校が常連校と呼ばれるように頑張ってほしい」と先輩に思いを託しました。

(※学年は大会当時のもの)
17日のオリエンテーションで初めて選手に伝えられたテーマは「佐渡で感じた大切なもの」。平館高校は「暮らしの中の遺産」のタイトルで版画を制作しました。



佐渡市長賞 「暮らしの中の遺産」
岩手県立平館高等学校

ちなみに...

最初は何か建物を題材に考えて佐渡の町取材していましたが、民家の軒下にくつもの石臼が並べられていたのを見つけました。地元の人に聞いたところ、江戸時代に佐渡金山で採れた金を鉱石から取り出すために使っていたもので、テーマに合うと考え題材としました。



遠藤 大輔さん

(写真提供) 岩手県立平館高等学校、全国高等学校版画選手権大会実行委員会